はしがき

本誌『古典古代学』の創刊にあたり，その視座を申し述べておきたい.

本誌は，筑波大学大学院人文社会科学研究科・古典古代学研究室（秋山学研究室）において研鑽を積み，秋山の指導下にある大学院生のための研究発表の場として，つまり同研究室の機関誌として発刊されるものである.「古典古代学研究室」なる名称のコースは，現段階で公的には組織されておらず，本誌の発刊をもって実質的な「古典古代学研究室」の活動を開始したいと考えている.

「古典古代学」という学問領域は，いまだにわが国では市民権を得ていないと言える．ただ理念的には，本誌主幹である秋山の出身大学である東京大学大学院人文科学研究科（改組により，実質的に現・総合文化研究科）西洋古典学専攻での経験から生まれたものである（たとえば『西洋古代史研究入門』〔東京大学出版会，1997 年〕所収，本村凌二「あとがき」にこの用語が見られる）．本誌でこのタームを用いるに際しては，その内包を以下のように考えた.

① 旧来の「西洋古典学」に含まれる領域はすべて含む.
② 「西洋古典学」の周辺部に位置づけられる領域，たとえば古代キリスト教文学（聖書学・教父学），ビザンツ学，オリエント史学，印欧語比較言語学，古典文献の写本伝承史学，古代中世科学史学などを含む.
③ ②へと内包を拡大するに際しての関連領域については，研究にあたって西洋古典語（ギリシア語・ラテン語），古代オリエント諸語，古代インド・イラン語（ヴェーダ，アヴェスター，サンスクリット，パーリ語）が介在するかどうかに照らして判断し，随時これを包むものとする．たとえば近世以降のラテン語文献に関わる研究・ルネサンス研究，ローマ教皇庁の公文書に関わる研究，わが国の悉曇学などは含まれる．ただし，たとえば純然たる近現代ギリシア史・イタリア史学などは原則として含まない.

上記①②③のような研究内包を総括する領域を示す用語として採用されたのが「古典古代学」であり，本誌の誌名にもこれを用いることにした．この用語に関連する考察としては，後出の第 1 論文（拙稿）を参照されたい.

なお，特に歴史学上の用語法として，紀元前 5 世紀ごろのギリシアおよび紀元前 1 世紀ごろのローマを「古典古代」と名づける伝統があるが，本誌の誌名は「古典古代・学」ではなく，むしろ「古典・古代学」を意図している．すなわち古代学全般を対象としながらも，その際，方法論的に考古学などを援用するのではなく，文献学を中心とするという主旨を現したものである．

本誌は原則として年１回の公刊を目指し，刊行時期は基本的に年度末とする．本創刊号は 2008 年度刊行ということになるが，今後の発行頻度に関しては必要に応じて柔軟に考える．

また各論文の査読は，秋山がこれを行うものとする．

記念すべき本創刊号には，「古典古代学」が扱う領域の広さを反映して，秋山による序文を兼ねた第１論文に続き，第２論文（菊地，哲学），第３論文（穴見，文学）の３本を収録することができた．各論文とも，まだまだ未熟な部分が多いが，「古典古代学」という新たな領域の出発に際して，読者諸賢のご高覧とあたたかいご配慮をお願いする次第である．

2009 年 2 月 5 日

筑波大学大学院人文社会科学研究科　准教授

秋山　学

目次

はしがき　i

目次　iii

秋山　学　慈雲と華厳思想
—「古典古代学基礎論」のために—　1－27

菊地英里香　J・ヴァイアー『悪魔の眩惑』
—魔女は罪人か、病人か？—　29－51

穴見恭子　ホラティウスとトロイア神話圏
—『カルミナ』を中心に—　53－78

執筆者紹介　79

欧文目次